佛教研究　第六卷　第四號

東條義門の國語學

龜田次郎

本會の幹事神田教授から、講演の題目を選定してそれを話しする樣にといはれたので、大に困つたのであるが、既に揭示もされた事であるから、仕方なく所謂事後承諾的にお話しする次第である義門法師の事蹟は、「若州偉人傳」中に「義門法師」があり、又本學の「佛教研究」の創刊號にも住田、吉澤、橋川の諸教授其他の論說が纏めて載せてあるので、今更事新しく私がお話をする迄も無いのであるが、只私は其國語學上に於ける事蹟について、聊お話をするのである。

私が義門法師の國語學者であることを知つたのは、今から二十五六年前、熊本の高等學校在學時代に古本屋から「活語指南」を購讀した時からである。これは明治三十二年十二月である。それから翌年秋東京へ行つて、義門の著書を讀んで、益其學識の非凡なのに驚嘆したのである。三十四年の夏季休暇に歸省中、大阪朝日新聞に磯野秋堵氏の「義門大德の手簡」といふ論文が見え、翌三十五年

の五月から八月までの同紙に、義門法師に關する史料が數回載せられてあつた。此等の論文を讀むにつれて、益其偉大さが知られて來たのである。然しこの偉大な國語學者である義門法師の事蹟は當時は未だ世人に知られてゐなかつたのであるが、この磯野氏の論文が出てから、ボツ〳〵世の注意を促がす樣になつた。近年大分喧しくなつて來て、大正八年には贈位の恩典を蒙り、若狹小濱町教育會でも、從來不聞の此學者の爲に遺蹟顯彰を行ふ樣になつて來た。今日では廣く世に知れ渡る樣になつたが、これは前にいつた磯野氏の紹介が其端緒をなしたので、氏の功績は忘れてはならないのである。

義門の家系や傳記は、法師の寺――若狹小濱町の妙玄寺――に「釋義門傳」といふのがあり、又先年「言語學雜誌」第一卷第五號にも、其史料が掲げられ、近くは前に述べた「義門法師」といふ單行本も出版されて、此等のもので詳しく明かる樣になつた。其概略をお話すると、法師の先祖は三浦市郎左衞門良興といつて、三河國東條の人で、德川家康の麾士であつたが、後年致仕剃髮して法名を敬智と稱し、鄕に還つた。鄕里に廢寺善念寺といふのがあつたのを修治して之に住し、自分の名をとつて良興寺と稱した。この敬智から敬願、敬傳と子孫に傳へた。この敬傳の時代に、酒井氏が武州川越に妙玄寺を建立して、この敬傳を請じて寺主とした、これが第一世である。これは酒井雅樂助正親の室、河內守重忠の義母明賢院の本願に依つたのである。明賢院といふ人は剃髮して妙玄尼

と稱し、眞宗に歸依した方である。後寛永十一年六月に讃岐守忠勝が封を若狹に轉ずると共に妙玄寺をも小濱に移した。これが今日儼存の寺である。敬傳から傳說、義傳、慈傳、傳瑞に傳へた。この傳瑞が義門の父である。この父傳瑞は其子實傳に傳へたが、實傳は弟靈傳に傳へた。これが卽義門である。それで妙玄寺一世敬傳から義門は第七世に當るのである。次が八世逢傳で、九世が好傳である。この次は今尙幼少で、中學へ通つて居る義山といふ方で十四五歲である。

義門法師は、姓は東條で、これは其祖先の住地からとつたので、元來は三浦氏である。天明六年七月七日卽ち七夕の日に小濱に生れた。父は妙玄寺五世の住持傳瑞である。この人は第四世慈傳に男子が無かつたので、西津西德寺から入つて第五世の住持となつたのである。母は名田の莊光久寺惠元の女榮照尼といつた方である。義門は九歲で父を喪ひ、專ら母の手で養育されたが、季子であつたので、幼い時から丹後國田邊顯藏寺の法嗣となり悅淨といつてゐた。幾もなく義父が死んだので、其後を襲いたが、居常事務の繁雜を厭うて、義子智道に寺事を委ねて負笈四方に良師を求めてゐた。文化四年七月實兄實傳が歿したので、檀越や親戚から寺務を襲がんことを乞うたが可かなかつたのである。然るに老母が切峻慫慂流悌して膝下に留らんことを乞ふたので、遂に再び妙玄寺の住持となつたのである。

法師は子供の時から顙敏で、本を讀むのが好であつた。又若い時から小濱の和歌の會等に出席し

て、いゝ歌を作つたと云ふ。生れたのは本居宣長の「言葉の玉の緒」の出版された翌年の天明六年七月七日である。（因にいふ「玉の緒」は安永に本が出來、天明五年五月に出版されたのである。）死んだのは、天保十四年の八月十五日月見の日である。七夕に生れて月見に死んだと記憶して居るとよい。

學問は誰に習つたかと云ふと、佛學は伯父の慶海――この人は篤學な人で、香月院深厲に習つた人である。――に習ひ、更に有名な靈曜の社中に入つて研究した。序に云ふが、靈傳の靈は、師匠靈曜の靈をもらつたらしい。義門と云ふのは、義は同學の親友義讓の義をとつたらしい。又梵暦の學は、普門律師に習つた。――これで「須彌山儀」を書いたのである。――然らば國語學は誰に習つたかと云ふと、別に師と云ふ者もなく獨學である。唯時々一人前になつてから、手紙で本居春庭や太平に問合はせたり、又太田全齋に聞たり、又明治まで生きて居た岡本保孝（況齋）と手紙を往復したりして居たが、師と云ふ可きものは無かつた。只備中に居た藤井高尚に和歌を少し習つた位である。

友人としては同鄕の伴信友、石田勘兵衞千穎、平井重民、田中貞風、戸田通元や江戸の太田全齋や岡本保孝である。又同宗派の法慶寺觀津、淨勝寺丹山、西鳥信廉等である。江戸から京都に來た清水濱臣とも交際して居た。門人は自分で謙遜してこしらへなかつた樣である。それで新井守村、

青山茂春外二三人丈位しかわかつてゐない。

法師の人物性行は信仰の强大と意志の鞏固とは其特長であることはいふまでもないが、元來身體の虛弱の人であつたので、酒も飲まず、煙草も喫まなかつた。時間を非常に惜しみ、歿する時まで書物を手離さなかつた。本を讀む爲に、時間を惜しんだ一例として、こんな逸話が殘つて居る。寺の障子を張るのに、一枚紙を張つては、一枚本を讀み、本を一枚讀んでは、紙を一枚張つて居たので、或る人が、障子を早く張つてから本を讀んでは如何かと云ふと、本を讀むのに考が中絶するといけない。一枚紙を張つて居る中に、讀んだ所を考へて居るのである。と答へたと云ふ。

人物は親に孝行であつた。又胸の廣い人で人と爭はず、寺は貧乏であつたが、飢饉の年には、寺で粥をたいて貧民に施したりした事もある。著述から見ても、人と爭はなかつた、穩和な人であつたのがわかる。死ぬ時には、京都で病にかゝり、小濱へ歸つて死んだのである。

著述は澤山あつた樣だが、嘉永二年に妙玄寺が燒失した折に、藏書と共に全部灰燼に歸したのである。今日殘つて居るもので、國語學に關係したものは廿七部ある。內、活語に關するもの十四、てにをはに關するもの三、音韻に關するもの三、假名遣に關するもの三、字引一、其他の雜が三部ある。今此等によつて法師の國語學についてお話をする。已に法師の國語學に關した著書大部分は保科東大助教授の「國語學小史」や「國語學史」に詳論してある、又赤堀又次郎氏の「國語學書目解題」

にも解題が見えてゐるが、今自分の話は、此等の分の外に發見した著述を加へてする。

義門法師は身は僧侶でありながら、何故國語學を研究したか。今までの國語學者は、義門法師は國語を國語として研究し、その態度は公正であると云つて居る。その點は成程その通りであるが、私はその研究の動機に就いて稍異見を持つて居る。

先年御橋惠言と云ふ人が私の所へ來て、義門法師の話をしてやつた事がある。それは「國學院雜誌」に發表したが、法師は初めから國語學を志して居たのでは無かつた。元來眞宗には澤山の學僧は居たが、いづれも、和語の聖典を解釋するのに、その言葉を解釋するにしても、和語の解はトンチンカンな事が多い。それで先づ和語の聖典の意義を明にしなければならない。それには國語の研究をしなければならぬと氣付いたのである。今日なら中學の生徒でも明かる樣な言葉をその頃の學僧は間違つて居たのである。でこれではいけない。先づ日本語を研究せねばならぬと思つて國語の研究を初めたのである。一體その頃までの國語研究者は、佛者なら佛敎に、神道者なら極端な國家主義に、歌よみなら歌學に拘泥して、一方に偏した說を立てゝ居たのである。然るに法師は宗義を明にする爲に研究を初めたのであつたが、その研究の方法態度は頗る公平で決して偏した說を立てゝゐないのは感服に堪へぬのである。

先づ第一活語に關係した著述からお話しする。

義門法師ははじめ本居春庭の「詞の八衢」を讀んだが疑問が出た。そこで文化十年三月十九日に「詞の八衢疑問」一卷を書いて本居家へ差出した。これが法師の國語學の研究に手をつけた最初の著述である。この本は東京帝大にあつたが、先年震災の時に燒失した。その寫しが京都帝大に在る筈である。この本は二十枚程の寫本であるが、後年出版の「山口栞」の一番最初の稿本である。

この次に書いたのが「指出廼礒」で、文化十二年四月四日に出來たが、出版は法師の歿年天保十四年である。この書は友人小濱の石田千穎の質問に對して、詞のはたらきを正しくすべき事やかなつかひを論じたものである。

次に「活語指南」の原本とも見るべきものを出した。原名を「詞の道しるべ」といふ。文政元年十一月九日に出來た。これは「詞の八衢」の增補の樣なものである。後年友人の平井重民が「略圖考證」といふものを撰んだので、これを見て法師の自分の書いたものを措いて、平井重民の書いたのを增補して、同じ書名をつけて出版したのが、後天保十五年三月法師の歿後に刊行の「活語指南」二卷である。それで今日刊行の「活語指南」は、嚴格にいふと、平井重民撰東條義門增補である。後明治十八年六月に小倉舊藩士里見義といふ人が、頭註を加へて出版した。矢張二卷本で、「頭書校訂活語指南」である。この里見といふ人は、大槻博士の名著「廣日本文典別記」の跋文中にいつて居られる如く、文部省に勤めてゐて、常に文典の事ばかり話して非常に篤學の士であつた。自著「雅俗日本文法」と

いふ四卷の著述もある。さて刊行本の「活語指南」の特色は、我國語學に於て忘るべからざるもので、今日吾々の學ぶ日本文典の骨子ともなつたものである。本居春庭の「詞の八衢」では動詞の活用形については最初の二段には何等の名目がつけて無く、三段目は切るゝ言葉、四段目は續く言葉、五段目はこその結辭といつて居たのを、義門法師は活用形の五段に各新に命名して、將然、連用、截斷、連體、已然とした。この名目で、今日吾々の用ふるのと違ふのは、三段目の截斷言丈である。尤も截斷言といふ名目も永く後年まで用ひられて居たのであるが、黑河眞賴博士が、明治二十三年八月に刊行された「詞の栞打聽」一卷に、

次に終止言は、いひはてゝ止む詞なり。先達は截斷言といへり。是は若狹の義門が名付けしなり然れども允當ならず、其ゆえは、天地の間のもの皆始終あり。これは强ひて截るにあらずして、自然にきるゝ意なり。たとへば繰り溜めたる絲を卷かむに、卷き終へて止むがごとし。故に今終止と改めたり。山海經には書の終りに終止とあり。終止の字これに據れり。されば終止言とは自から詞のいひ終りたるをいふ名目なり。

と說かれてから改稱されて、今日一般に用ひられて居るのである。又「詞の八衢」には活語の研究は大成してゐるが、良行變格は氣付いてゐたが、まだ別にこれを設けなかつた。それをこの「活語指南」には新にこれを設けて說いた。又形容詞の活用は「八衢」には說いて無いのを、この「活語指南」

には委しく說いてゐる。只今日吾々のいふ下一段活用の「蹴る」の一語丈は、法師は氣付いてゐないのである。この下一段話用の事は少し後に出た林國雄の「詞の緒環」の中に初めていはれた說である。この事は一寸序であるから茲に注意しておく。又言語全體について言語を活くものと、活かざるものとの二大別をしたのは、また大に注目すべき所である。前にもいつた樣に、この刊行の「活語指南」は法師の晩年の作で、其歿後に出版されたもので、元來矢張晩年の作である「和語說略圖」といふ一枚の文典の表の註解である。丁度宣長の「紐鏡」の註解が「詞の玉の緒」であると同じ樣なものである。「和語說略圖」の事は下にお話する。「活語指南」の來歷をお話する順序で少し話が前後したから、一寸茲に注意をしておく。要するに「活語指南」は「八衢」の增補訂正である。

「磯の洲崎」はこれも活用をなほざりにすまじき事並にかなつかひの事を論じたものである。この書は當時宣長と仲の惡かつた淸水濱臣が「新撰字鏡」の講義の爲に京都に出て來て居たが、法師もこの時分高倉學寮で講義をして居たが、この時濱臣は義門の「指出の磯」に對して「泊々筆話」を書いて義門に質したので、これに對して書いたものがこの「磯の洲崎」である。これは文政三年五月廿一日に出來、天保十二年九月に增補して、同十四年卽ち法師の歿年に前記「指出の磯」と合刊されたのである。

「山口栞」は、初稿本と再稿本とある。初稿本の寫しが確か神宮文庫にあつたと思ふ。これを增補

して三卷にしたのが、今日普通傳つて居る刊本の「山口栞」である。天保四年十一月十日に出來て七年五月刊行である。本書は動詞、形容詞のみに就いて書いたもので、初め春庭の「言葉のやちまた」を見て書いたが、更に「詞の通路」が出版されたので、之を見て、自著の不完全な所を增訂したのである。この書は本居の說を完成したもので、「活語指南」と共に最も注意すべきもので、活語に關する種々の事項について詳しく論述してある。法師の活語に關する學識の深大を窺ひ知ることが出來るものである。誠に立派な著述である。

「和語說略圖」は、活語と形容詞との變化を圖にしたもので、「八ちまた」に依つて作つたものである。初め「八衢友（かどみ）略會圖」と云つたのを、後に「和語說略圖」と改めたのである。これは一枚の表であつて、此を詳くし說明したのが前に述べた天保十五年刊行の「活語指南」二卷である。この略圖は天保四年に出來て、同十三年に追加をして、刊行されたのである。

次に書いたのは「和語說略圖聞書」であるが、これは寫本があるばかりである。それは「和語說略圖」が單なる表で分りにくいから、僧侶を集めて、之を說き、引例に眞宗の聖敎を用ひて說明したものである。天保十年六月に出來て居る。

「語辭林香記」は「佛敎研究」に橋川敎授も書いて居られるが、「眞宗聖敎」の十回講義である。又「山口栞和語說略圖解」や「語辭辨說聞書」といふ表題になつてゐるのもある。共に同本である。天保

十一年五月三日から十三日までの間に講述された筆記で寫本で傳はつてゐる。

「和語說略圖講解」は、又「和語說略圖講說」となつてゐるのもある。寫本二卷で未刊である。これは前に述べた「和語說略圖聞書」と同本であるが、然し其內容を見ると、「聞書」より多い。「聞書」の方は、只天保十年六月六日の講說を將了が筆記したものであるが、この「講解」の方は上卷に、六日の講說の外に兩度とあつて日未詳の講說とが合せて記して、卷末に、

右ハ先考康存ノ日西廣寺將了子等ノ爲ニ口授シ玉ヒシナリ、將了筆受ノ記ニ先考朱ヲ以改メ玉ヘルヲ借得テ寫了。

文政四年巳七月　　妙玄寺法傳珍藏

と奧書があり、下卷は、十三、仲浣、二十、二十一、二十二の五日の講說が記して、卷末に、

此口述ハ、先考義門老師西廣寺將了等三四僧ノ爲ニ敷演シ給フノナル由シニテ、同子耳飡ノ筆受アリ、今茲乞テ之ヲ借得テ謄寫シ畢、後昆永ク寶藏シテ、此恩賜ヲ拜セヨ、必ズナハフラカシゾ。

安政二年乙卯五月　　妙玄寺法傳

と記してある。卽ち六月六日から二十二日までの七回の講說筆記である。察するに「聞書」の方は、只一回丈の筆記で、この「講解」の方は、七回の講說筆記である。前者は一部分で、後者は全部のものである。

話語に關した著述は以上十四種九部である。

第二てにをはに關する著述で、最初に出したものは、文政六年刊行の「友鏡」である。一名を「詞遣友鏡」といふ。宣長の「紐鏡」の不完全な所を訂正增補したもので、宣長は三轉四十三段に分けたのを、義門法師は五轉十九類五十二段にして訂正增補してゐる。これを「友鏡」と名付けたのは「紐鏡」を見るにつけ、この「友鏡」をも必座右に備へつけて置いて友として見ねばならぬといふ事から來て居るのである。前に述べた「和語說略圖」や「活語指南」と同じくこの「友鏡」にも活用形に、將然連用、截斷、連體、已然と五段に名稱を附けてある。これは法師の創唱である。

宣長の「紐鏡」の註釋として「詞の玉の緒」七卷を著はした樣に、義門法師も亦「友鏡」の註釋として「玉の緒繰分」五卷を著はしてゐる。「山口栞」や「活語指南」と併んだ名著である。これは天保二年十二月に稿を起して十二年に出來上つたが、刊行は歿後嘉永四年である。これは「友鏡」の註釋書ではあるが、書中「紐鏡」や「玉の緒」の訂補の論述が多く見えるのは當然である。表題を繰分といつたのは「玉の緒」には間違つて居る處や不完全な處があるから、それを繰り分けて選擇するといふ意味からつけたのである。前に述べた「活語指南」やこの「玉の緒繰分」の刊行は、共に法師歿後である。それを共に在世中の天保十二年刊行として居る人があるが、何れも間違で、天保十二年は跋文の年代からいつたのである。一寸注意しておく。

又「友鏡底廼影」といふものがあるが、これは義門法師の著述目錄にも見へてゐるが、私は未だ見ない。妙玄寺にも無い。今から四十年前の明治十九年十月に、堺市の國語學者小田淸雄翁が、宣長の「御國詞活用抄」を補正して刊行した中に、この書を引用してあつたが、この小田翁の手澤本が、現今同じ堺市の大槻季夫氏の手許に所藏されてゐるとの事である。自分は未見であるから、內容はわからないが、書名から推測すると、「友鏡」に關係した著述らしいから、てにをはに關する詳論であると考へるが、或は「友鏡」に照して、活語を蒐集したものともおもはれる。それは小田翁が「御國詞活用抄」の補正に引用した點から推測した考である。然し自分には未見のものであるから、其書名から推して古くてにをは關係書としてあげておく。正確の事は他日の攷究に讓る。

以上はてにをはに關係した著述で三部である。

第三音韻に關する著述は、また其學識の非凡を示して居る。先づ第一に「於乎輕重義」二卷があるこの書は寫本で傳はつて居て、黑河春村翁所藏本と妙玄寺所藏本との二種あつて、內容は多少異同がある。この事については、已に高島正氏が本學の「佛敎研究」創刊號に詳論してあるが、骨子は同じ樣である。黑河本は奧書に、

文政十年乙亥四月廿一日起筆閏六月五日脫稿

同十二年己丑五月二十日自寫終

とあり、妙玄寺本は奥書に、

文政十年乙亥四月二十一日起筆閏六月五日脫稿

天保四年癸巳霜月上旬令青山茂春書寫之畢

とあつて、尙追加の奥に、

若狹小濱妙玄寺藏書

嘉永二己酉歲春竊書寫之

洛陽眞敬寺湛靜

助筆　若州法雲

とある。時代から見て、黑河本は初稿で、妙玄寺本は再稿であらうとおもはれる。妙玄寺本の奥書に見える眞敬寺といふのは、法師が入洛の時止宿した寺で、湛靜といふのは法師と親交のあつた人である。助筆の法雲といふのは、門人で法師の語學上の系統に屬する著書が數部ある。神田敎授が所藏されて居る。今この「於乎輕重義」の內容をいふと、從來五十音圖の阿行の於と和行の乎とが所屬を誤つてゐたので、古言を解釋するに非常に不都合であるのみならず、字音を研究する時にも、この所屬が間違つて居つては、少しも韻書と合はないのである。それで在來の語學者殊に僧契沖の如きは隅違の通ひなどゝいつて、極めて苦しい說を立てゝ居りました。これを本居宣長は「字音假

字用格」を著して、其中に於乎所屬辨を說いて於が阿行に、乎が和行になければならぬといふ理由を、三類八證を擧げて論じました。三類とは一は古書、二は古音、三は悉曇であります。これを改めてから從來の疑問が釋然として氷解したといはれて居るのである。宣長と同時代に富士谷成章が「脚結抄」といふてにをはの研究の著書の中に、經緯圖といつて五十音圖を擧げて、この於乎の所屬を正して揭げてあります。それで後世この本居、富士谷兩派の學者の間に、先後の論が喧しくありますが、それは兎に角、この於乎所屬が明瞭になつたといふ事は、國語學上大に祝すべきことであります。宣長が「字音假字用格」の中に於乎所屬辨を書かれましたが、まだ不完全な處があるので、義門法師はこの「於乎輕重義」を著はして詳細に論定せられたのである。法師は其の論定に二個の方法を取つて居られます。第一に證據を擧げ第二は疑難を解くといふ二つであります。第一の證據には二十個條ある。宣長の「字音假字用格」の僅に三類八證を擧げて居るのを、更に增訂して居るのである。これが上卷の內容である。第二の疑難の解釋については二種あつて、其一は他難を解くこと、第二は前證を質すことである。それで第一については、二個の難問に對して詳細に答へ、次ぎに前證二十個條に對しての問答であります。これが下卷の內容である。宣長の於乎所屬辨は卓見には相違ありませんが、まだ不完全であつたのを、法師が此「於乎輕重義」で其缺點を補つて確實不動のものとされたのである。

次に「男信」は天保六年六月二十二日に出來て、同十三年三月に刊行された。三卷本である。書名は上野國利根郡の鄕名「奈萬之奈」に「男信」といふ字をあてたことについてんむの區別のことに考初めしによつて名付けたのである。この書は卽ちんむの區別を論じたものである。これは「韻鏡」に臻攝山攝の字類はんで、咸攝深攝の字類はむである。然るに宣長は日本にはむはあつたが、んは決して無かつた。んは音便に依つて出來たのであるといつた。これに對して、上田秋成は日本にはんむ兩存說を唱へて論難をした。この論難は宣長の「呵刈葭」といふ書物に見えて居る。法師はこの「男信」に於て古書から汎く例證を擧げて、んむの區別は確に存在してゐたといふことを詳論してゐるのである。法師とんむ兩存說を唱へたのである。

法師と同時代に備中の關政方（マサミチ）といふ人が、天保十三年に「傭用例」一卷を著はして、んむの區別を論じて字音の事に論及したものがある。これに對して法師は批評をしたが、この評に著者政方が答へたものを集めたものに「傭用例評辨」一卷寫本がある。天保十三年十二月に出來てゐる。これに關係した說は法師の著述で、後にお話する「活語餘論」の中にも見えてゐる。

以上三部が音韻に關する著書である。

第四假名遣に關するものである。これは字音の事の研究であるから、或は見方に依つては第三の音韻に屬するものであるが、普通の見解に從つて、又書名の上から見て假名遣としてお話しする。

この部類に關する著述は法師の著述目錄の廣告には出てゐたが、從來餘り世に知られなかつた樣である。

妙玄寺に本居宣長の「字音假字用格」の欄外に法師が一ぱい書入をしたものが所藏されてある。自分はこれを讀んだが、これは法師の所見を記したものであつた。それで自分は姑く名付けて「字音假字用格頭註」といつておく。處が黑河春村の門人で白井寬蔭といふ人が、萬延元年閏三月に刊行した「音韻假字用例」といふ三卷本の中に、法師の「字音假字用格餘論」の所說として大分引用してある。この「餘論」といふ書物は自分は未だ見ないのであるが、恐らくば妙玄寺所藏の「頭註本」を指すのであらうかとおもふ。「頭註本」の書入文と「假字用例」の引用文と異同があるから、確かには斷定は出來ないが、多分同一本であらうと考へる。然し全く別本かも知れ無い。この外に法師の著述に「假名遣千世の古道」といふものが「男信」や「活語指南」などの初刊本の卷末の廣告に見えてゐるが、これも自分は未見である。妙玄寺の著述目錄では、嘉永二年に燒失したと記してある。未刊の上に燒失した樣である。誠に遺憾に堪へぬ。この書は書名から推測すると、多分國語假名遣の著述であつたとおもはれる。

尙前に述べた「指出廼磯」や「磯の洲崎」の中にも、假名遣の事が見えるのである。

以上假名遣に關する著述は三部——或は二部——である。

第五は辭書である。これも「山口栞」『活語指南」の初刊本の卷末の廣告に見えて居るもので、「類聚雅俗言」といふ書物である。矢張未刊である。一卷本で、妙玄寺にあるのは十行書で、雅言の部俗言の部各四十枚宛のもので、雅俗言を集めた極簡單な語彙集である。文化十一年三月三日の自序がある。未定稿の樣である。本書にも異本がある。一は妙玄寺所藏本で、一本は明治五年八月青山如幻の序があつて、この中に、妙玄寺所藏の原本が燒失したので、法師の嗣子法傳師が大に歎いて、これが獲得を切望せられてゐたが、偶、古河敎典といふ人の手許にあつたから、二部寫し取つて、一部を妙玄寺に納めて法傳師の望を叶へ、一部は自分の手許に留めたといふ事が記してある。內容から見ると未成稿ながらこの方が原本らしい。辭書に關するものはこの一部だけである。

以上五類の著述は、法師の學問の深さがわかるものであるが、下の第六雜の部に屬するものは、却つて法師の學問の廣さがわかるものである。現存のものは三部ある。其一は「活語雜話」で、三編刊行されてゐる。

第一編　天保四年二月十一日初稿同九年四月二十三日成同年刊（妙玄寺所藏本に據る）一本同十年二月刊（普通流布本に據る）

第二編　天保十年正月二十三日成同十一年刊

第三編　天保十一年十一月十日成同十三年九月刊

である。この書は語學上について諸學者と往復して論辯したものをあつめたもので、全部八十箇條ある。何れも見るべきものばかりで、語學資料として大に珍重すべきものである。第四編も出版の筈であつたが、遂に世に出ずに終つた樣である。

第二は「活語餘論」である。これは寫本で、妙玄寺所藏本は三卷ある。或はこれが前の「活語雜話」の續編かも知れぬ。この書は第一卷は天保十三年に出來てゐるから、この年からつゞいて出來たものである。內容は活語に關係した事のみではない。自序のうちにも友人が見て活用語辭の論說が多いから、活語の二字を標せよといつたので書名をつけたと記してある。全部八十七箇條あるが、中々珍重すべき資料が澤山見えて居る。

第三は「三部經和語說」五卷である。原名を「入言小補」といつて、又「眞宗聖敎和語說」とも、只單に「和語說」ともいつて居る。この書は天保十三年十一月二十三日から翌年六月までの間に、脇袋村の法順寺で、三部經を講說したとき、門人共の筆記したものである。書中に光德寺の法雲、永願寺の說言、法順寺の慧敎等筆記者の名が見えてゐる。矢張其書名の示す如く、「三部經」講說に際して國語上の意見を述べられたもので、亦見るべき卓說が多いのである。筆記者の一人法順寺慧敎師の自筆本が現に其寺に遺つてゐる。其曾孫に當る本學在勤の堂谷憲勇氏が祕藏されてゐる。書名は「入言小補」となつてゐる。この書は明治十一年五月に京都護法館から第一卷丈刊行されて居て、他の

卷は未刊であつたが、近年「眞宗全書」の中に收められて、全部刊行され廣く世に行はれてゐる。

尙法師の語學上の著述に「月草」といふのが、目錄や廣告に見えてゐるが、これも未刊で、自分は未見である。妙玄寺の著述目錄にも燒失とあるが、これは矢張「雜話」や「餘論」の類の樣である。或人はこの「月草」が「餘論」の事であるといふが、自分にはまだわからぬ。他日の攷究に讓る。

法師の語學上の著述は大略以上述べた通りである。文化文政時代のものも二三あるが、大部分は天保年間のものである。又出版も、其晩年か歿後であるのは注意すべき事である。然らば法師の國語學研究の動機は、何れにあつたかといふに、法師は眞宗聖敎の眞意を明かにする爲にあつたのである。この事は法師の最初の語學上の著述「磯の洲崎」の五丁ォから七丁ウにも其趣が見えてゐるし又「釋義門傳」にもこの事は記してある。普通の人ならば佛敎に拘泥して一方に偏したのであるが、法師の研究は頗る嚴正公平であつた。この事は特に大に注意すべきであると思ふ。法師以前は勿論以後に於ても、各方面の人達が國語の研究をしたが、何れも多少其本業に拘泥して偏した所があるのに、法師丈はこの弊に陷らなかつた點は、實に感服に堪へぬ。又この樣に偉かつた法師が、一部の有識者の外には知られず、其鄕里小濱に於てすら、近年まで誰も知らなかつたのは何故であるかこれは申す迄もなく、法師は當時其學風が日本全國を風靡して居た本居一派とは、何等の緣故も無い。その上に宗派に於いても、其寺格も至つて低い。學階も亦低い。たゞ語學を研究して居たとい

ふのみで、當時大谷派の正統派の學僧とは何等の因緣も無い。全く學問の上に於ても、宗派の上に於ても、單獨孤立の姿で何等の勢力も權威の地位も持つて居ない。加之法師は門人も至つて少く、僅々二三名である。著述も未刊のものが多く、名著でさへ晩年や歿後に刊行されて居る位である。斯る境遇であつたから、學界に非常に貢獻したに拘らず、その酬いられる處が非常にうすかつたのである。然し當時天下を風靡してゐた本居派からは內心甚だ畏敬されてゐた樣である。それは法師の鄕里小濱の伴信友翁の後裔信興氏の手許に所藏されてある一通の手紙で、この事は明かに證明されるのである。それは本居大平の門下三州吉田の人中山美石から信友に宛てたもので、其中に「あなたの土地に義門大德といふ人があるが、てにをはや活語の事等をよくいつてゐる。あの人は本居派とは何等の關係もない人である。それで何とかして春庭の門に入つて、著述に序か跋を書いて貰ふ樣にすると大變都合がよい。何とか可然取計らつて吳れい」といふ意味が書いてある。それに對して、信友は次の意味の返事を出して居る。「世間には自分が成長すると、自分一人で成長した樣におもつて、親の事を知らないでゐる者が澤山ある。私は好きな學問をやる。一日に十里づゝゆるゆる歩いて行つて、てにをは家に長持を持たせて行く。お互に安心である」とある。これは信友は本居門下であり、又義門法師とは同鄕の學友であるから、双方へ圓滿に取計ふ考で、此樣な婉曲な返事をしたものとおもはれる。この手紙は、一方には當時の義門法師の本居派に對する關係や狀況が

明かるし、一方には信友の學友に對する態度や其穩見な人格性格が窺知されるのである。この手紙は來書の中に朱字で返書の寫しが書入れてある。後年信友は法師に好き機會にこの話をされたものであらう。それで法師は後日本居派の人々と交際もされ文通もされる事となつたと推測されるのである。

法師が歿なられてからまだ七十年しか經たぬが、この人の學問の遣方は、時代は三四十年ちがふが、丁度獨逸のヴントの遣り方と似て居るとおもふ。ヴントが民族心理を研究する爲に、言語學を究め、其名著「民族心理學」の第一卷に「言語篇」を公刊したが、其研究は誠に公平である。法師が宗義の眞意を究める爲に國語を研め、數多の著述を公にしてゐるが、其研究は實に嚴正である。この東西兩洋の二學者の研究態度は、能く似てゐると考へる。今日日本文典は澤山ある。此等は皆西洋流を加味して立派に出來て居る。然し其骨子の學說は、法師の所說を承襲したものに過ぎぬ。卽ち骨は法師のもので、皮は西洋流であるのである。

法師は生前に酬いられる所が甚だうすかつたとはいへ、有識者間には其當時から學識を感服されてゐたのは勿論である。法師の學說の大部分は本居宣長春庭父子の大成した我國語學に對して其完成を仕遂げたのである。法師の著述は、一として本居父子の所說の不完全を補訂しないものは無いのである。本居父子の研究は法師を俟つて茲に完全に確立したといふべきである。法師の學友であ

つた岡本保孝は、其著「況齋叢書」第三十八に所收の「詞の玉緒攷」序文の中に、

わが方外の友若狹國小濱妙玄寺義門和尚、今より四十年前に玉緒繰分五卷を著して、刊本にて人間に流布す。これは誠に本居氏の忠臣にて、杜預の左傳にかしづくごとし。

といつてあるのは、實に至言である。

最後に自分は切望する・國學の大家には、已にそれ〴〵其全集が刊行されてゐる。本居父子然り、賀茂眞淵、橘守部、平田篤胤、伴信友諸氏亦然りである。近く僧契沖の全集も刊行されんとするが法師の全集は未だ世に出て無いのである。法師は我國語學上の大貢獻者、否偉勳者である。去大正八年にはこの國語學の功に對して贈位され、天恩枯骨に及んだのは吾々の感泣に堪へぬ所である。又其翌年には本山大谷派東本願寺からは宗學上の功に對して其學位を追贈された。其鴻志は亦吾々の感謝する所である。忠實なる研鑽は時代を逐うて愈其眞價を露すに至つたのは、誠に欣ぶべき事である。然るに法師の著述の多數は、今尚未刊の儘である。年代を經るにつれて、漸次散逸に歸せんとしつゝあるのは、遺憾の極である。只僅に妙玄寺に、殆んど全部が纒つて所藏されて完備してゐる丈である。法師の成遂げた事業は、大にしてはわが帝國のため、小にしては眞宗大谷派のために盡したものである。これは自分の專攻からばかりいふのでは無い。寛文年間に創立された高倉學寮から、二百七十年後の今日の大谷大學に至るまでに、數多の學匠や高僧も輩出した。尚今後も續

々出るであらうが、この不聞の學僧のために、全集刊行の企圖を望むのである。宗内には他に多くの事業もあらうが、この全集刊行をも亦その一に加へて自分の希望を充されん事を切に願ふ次第である。

（本篇は、去十一月十四日開催の本學史文會大會に於ける講演筆記なり。）